

時代の現象に通用なる性質(時代精神)は、其の時代に於ては普遍的であり、其の時代の一々の現象の有する特殊性に對しては、之を普遍性と稱することが出來やうけれども、之を一層廣い見地から見るときには、其の所謂普遍性の多くは、實は其の特別なる時代の特徴ともいふべきものである。國民歴史を一貫して考へる場合、また一步進んで各國の歴史を比較して研究する場合には、其の所謂普遍性の多くは、實は一の特別の時代の特殊性である。予輩は著者が人間の生活には、それよりも更に一層普遍的なる要素のあることを認められんことを希望する。而して予輩はまた著者に向つて、新しき意義に於ける史學研究は、果して單に所謂『文化史的研究』のみに止まる乎を更に考慮せられんことを望まざるを得ない。

(内田 銀藏)

Ludwig Burgstrasser: Die diplomatischen Kämpfe vor Kriegsausbruch.

(戰爭勃發前の外交折衝)

これは、ヒストリーリツシエ・ツアイトシユリフの第百十四卷に掲載されて居る論文で、單行本として公にされたものではない。然しながら雜誌論文とは云ふものゝ、通計百四頁に亘る長篇であつて、且つ分量に於てのみならず、其出來榮わかから評しても、立派な著書と同等に見做して差支なきものである。全篇は五章に分かれたれ、(一)關係史料、(二)セラエヲ兇行より塞耳維の回答迄、(三)塞耳維に對する澳國の宣戰迄、(四)獨佛兩國の動員迄、(五)英國の態度決定、といふ順序になつて居るが、其中で最も多くの頁數を費して居るのは第二章である。これはセラエヲ兇行が戰爭の發端であるといふので、之を詳論したからであるが、敵味方を論せず辯護の仕様のないのは兇行事件であるから、それに附け込んで澳國の態度を辯護し、同時に其同盟たる獨逸の辯護をして居る所は巧妙な論じ方ではあるが、公平を缺くものたるは争はれ難い。著者は自ら題して『戰爭參加諸國の公表文書を基礎とせる批評的研究』と云つて居るけれ

ども、これは少々手前味噌も加味しての話しである。唯從來の獨逸人の著書に比べて、いくらか公平と云つても宜しい點は、英國の態度に對する見方である。多くの獨逸人の所論は、此度の大戰役を以て英人が久しくたくんだ隱謀の結果だとして居るのに反し、著者は英國を以て最初は眞面目に

平和維持に盡力したものと認めて居る。これが論文の最も出色な點だ。尙ほ此論文は戰爭開始當時に際物として出版された多數の著書とは違ひ、關係諸國の公表材料が一通り出揃つてから、それを熟讀の上に著はしたのであるから、甚しい出鱈目もなく、また敵國の事に關して罵詈謗の限りを盡くすといふこともなく、議論のやり方が甚穩である、大体に於て學術的論文の態度を保つて居るこれが此論文のとるべき所であると云つてよからう。【原】

敦賀郡誌

福井縣敦賀郡役所編纂

大正四年十月三日發行

本書は福井縣敦賀郡役所が山本元氏に囑し三年有餘の歲月を費して成れる物、菊版一一七七頁、

附録三四頁の寔然たる巨冊なり。全編地誌、沿革郡治、社寺古蹟、人物の五編より成り、年表、釋解、考據、書目、郡内採收記錄文書、及び索引を附録とし、卷頭及び文中に興味ある多數地圖古文書、人物、遺蹟、遺物等の寫眞を挿入して本文の記事を補へり。

明治、大正にわたりて府縣市郡町村誌の編纂相次ぎしは文獻史上特筆に値すべき事にて、其間推奨すべき名著も亦尠しとせず。今本書を見るに、編纂の體制殆ど間然するところなく、記事概して周密精透、敦賀郡の現況を叙説するに於て遺憾なきと共に、通讀の間讀者をして其多望なる將來に囑目せしむ。殊に余輩の見て快とするは、史的記述の毫も地方的偏癖に陥らずして、大局より着筆せられ、同郡の生命ともいふべき敦賀町を中心として運輸、交通、商業其他の産業に關し經濟史上頗る有益なる記事を以て滿たさるることはなり。これ編者其人を得しと史料蒐集者の努力とに依るべく、同種編著中の白眉なりと謂ふべし。(定價貳圓五拾錢)【三浦】